



窓のない、暗い部屋に、たったひとりの上司が怒っていた。

「ハケンの分際で、何だと思っているんだ！ オレの方針が気に入らないなら、やめてもらったっていいんだ。そうだろう！？」

…私が怒られているわけではない。

私も派遣社員だが、上司が怒っているのは、男性営業マンのハセガワくん。ハセガワくんの言い分はもっともだった。特殊な営業を行うこの部署は、営業訪問先が限られ、上司はうるさく質の良い顧客を求め…それなのに棒グラフの成績は、まるで気軽な日用品でも売るかのように、どんどん伸びなければならない、と言うのだ。

「上」とは無茶を言うてくるもの…とはいえ、たしかにシステムに無理があった。ハセガワくんが一言いいたいくなる気持ちも、わかる。

だが、私たちは派遣社員なのだった。

「ここはオレが任されている！ オレが四十代の時にいた営業所で同じようなことがあったが…」

上司は「課長」と呼ばれているが、実際は「元課長」である。定年退職後の再雇用で、派遣部隊を束ねるマネージャーをしているのだ。時給は二千元だという話だった。私の時給は千三百円。ハセガワくんも、千三百円だ。

窓ひとつない、この暗い部屋で、元課長は怒鳴り続ける。

いまさら、動く心などなかった。この世に正義や公平など、微塵も存在しないことは、長いハケン稼業でよくわかっている。ハセガワくんが馬鹿なのだ。ハケンに人格があっていいわけがない。そして、「正社員様」は絶対だ。

私はチラリと時計を見た。終業の時刻を、既に十五分過ぎている。

部屋には私だけが残っている。上司は私の視線に気づいて、咳払いした。

「…キミはもう、帰る時間だな。キミは女性だから、ここをクビになればスーパーのレジででも働けばいいが、ハセガワは男だからそうはいかないだろう。オレだって、簡単にクビにしたいわけではない」

つまり、自分がカッとしすぎたと認めているわけだ。

私は返答せず、曖昧に微笑んだだけで、バッグを抱えて立ち上がった。

「お先に失礼します」

私は今から、東京に行く。

*

今池の駅で、コインロッカーから大きな旅行鞆を取り出す。中には二泊分の衣服と、すこしの名古屋みやげと、いくつかのチケットが入っていた。

ショッキングピンクの四角い旅行鞆の内ポケットから、私は大切なチケットの一枚を探り出した。

十九時発、東京行き新幹線「のぞみ」二五四号。

指定席を取ってある。

夢がつまった鞆を抱え、私は軽い興奮状態で地下鉄に向かった。短い階段を一気に駆け下り、ちょうど来ていた高畑行きに乗り込む。名古屋駅までは十分だ。

週末の地下鉄車内は、飲みに行く人、遊びに行く人、待ち合わせに向かう男女でいっぱいだ。繁華街を抱える栄で半分が降り、残りの乗客のほとんどが名古屋で吐き出される。

人混みの中を、焦る気持ちで歩いた。

見慣れた名古屋駅の構内も、上京する日は特別な光景に思える。いつもはただ、憂鬱なばかりの、周囲の浮かれた人混みに、今日は違和感なく混ざることができる。

こうこうと明るいテルミナ地下街を横切って、JRの乗り場に向かう長い階段をのぼる。表に出ると、生暖かい風が吹き付けた。肩の旅行鞆を背負い直して、いよいよJRの駅ビルに入る。

両脇に並ぶ、丸い柱と白い壁。KIOSKでペットボトルのお茶を買ってから、突き当たりの新幹線乗り場に歩く。

高価なチケットを改札に通したら、もうそこは別世界だった。ホームに立って、新幹線が入ってくる時の風を受ける瞬間が好きだ。この風とともに、私はどこまでも行ける。そんな気がする。窓を光らせながら、新幹線が目の前に滑り込んでくる。

夏の十九時の、薄暗い夜を感じながら乗り込んだ。指定券の番号を探し、席に落ち着く。ふたりがけの窓際だった。ずいぶん早く取ったチケットなのだ。動き出すと、みるみる名古屋が遠ざかった。私はペットボトルの栓をゆるめ、シートに身体を預けて夜に沈んだ窓外の景色をぼんやりと見続ける。

最初に東京へ行ったのは、たしか十三歳のときだった。家族旅行で行くことになり、東京で暮らしたことのある父が、新聞折り込み広告の裏に、ぐるりと円を描いて私に教えた。

「東京はねえ、山手線がこういうふうに丸く走っていて、それを中心にたくさんの電車が出ているんだ」

十五歳の修学旅行も東京だった。だが、ことさらに思い入れて観光した記憶はない。はっきりと「東京へ行くんだ」と決意したときには、十八歳になっていた。

「出版関係の仕事につきたいから、東京へ行く」

進路を決める際、両親に告げた。十代も半ばを過ぎ、私には頑固な確信が芽生えていた。

私は、活字の世界で仕事をする。

きっと作家になるだろう。

母は首を振った。

「何言ってるの。うちには三人も子供がいるのよ。東京へやるお金なんか無いわ」

父も首を振った。

「出版社なら、名古屋にだってあるだろう。ほら、中日新聞の書籍広告をもらんよ」

父の話は承服できなかったが、『お金がない』という事情の前には、なすすべはなかった。私はさらに、すこし遠いだけの大学をも反対されてあきらめ、けっきょく、通いやすい地元の私大に入学した。

あれから何度、東京に来ただろう。

単に遊びに来たこともあったし、入っていたサークルの全国大会での遠征もあった。そして大学を卒業してからは…私は自作の同人誌を売るために、年に幾度も東京へ向かう。

品川を過ぎ、「のぞみ」は予定通り二十時四十三分に東京駅に入った。魔法の時間が始まる。

ホテルはいつも、大井町だった。薄い壁で区切られた狭い部屋に、無愛想なシングルベッドがひとつ置いてあるだけの部屋。東京ビッグサイトまで一本で出ることができ、宿泊料が安いので常宿にしている。大井町駅の改札を出ると、頭上に東京の夜がくろくろと広がっている。

イベント日の朝は、大井町の駅ビルに入っているコーヒーショップでカフェオレとチャパタ・サンドを摂ることから始める。人のまばらな店内でカフェオレを飲んで気持ちを落ち着けると、大きなカバンを抱えてエスカレーターを延々と下り、りんかい線に向かう。駅は、同じ場所に向かう同志たちでいっぱいだった。友達同士、群れて向かう仲間、神経質な顔でひとり歩く者…。荷物の多寡もいろいろ、歩くスピードもいろいろ。きっと出身地もいろいろだ。

国際展示場駅に来れば、さながら人の洪水だった。

遙か先の「東京ビッグサイト」まで、人の流れが川のように黒く続いている。

今日は天気が良いからずいぶんマシだ、と私は思う。去年の冬は風と雪がひどくて、最悪だった…。

駅から会場の敷地まで、ゆうに十五分はかかる。敷地内からイベントホールまでさらに遠い。黙々と歩き続ける。

春の陽気に汗ばみながら、やっとホールに入る。入り口には机でゲートが設けられており、開場前のこの時間、ここより先は「サークルチケット」を持つ者だけが入ることができる。同人誌を買い物する側の「一般入場者」は、どこか別の広いところに並んでいるらしいが、並んだことがないのでどこかは知らない。

チケットに振られたスペース番号を見ながらホールを歩いていると、馴染みの顔をちらほら見かける。

「あっ。ヒルガさーん！」

ペンネームで呼ばれる、ふしぎな空間の始まりだ。

手を振られて、私も手を振り返す。

「こんにちわー！」

「ハナマキさん、もう来てましたよ！」

「ああ。彼女は深夜バスだから。早朝に着いたんですね」

「ヒルガさんは？」

「私は新幹線！」

「ハナマキさんと、カネちゃんと、終わったらカラオケ行こうって約束してるんですよ。ヒルガさんも行きますよね!？」

「行きます、行きます」

「じゃ、六時に新宿東口で待ち合わせですから～」

「東口…のどのあたりですかね？」

「出てすぐのところでいいですよ。迷ったらケータイあるし、大丈夫です」

「わかりました。じゃあお疲れさま！」

「お疲れさま！」

ホール内には、机と椅子が無数に、整然と並べられている。机と椅子でできた列のそれぞれに、アルファベットが振られ、さらにその列を構成する机ひとつひとつに数字が決められている。

私はチケットに書かれた番号の列から、自分の机を探し出して、ようやくスペースに滑り込んだ。

隣はハナマキカオルちゃん。おなじ名古屋出身の親友で、一緒に机を申し込んでいる。

「おはよー！」

と私は言いながら、肩から荷物をおろした。たどり着けてほっとする。

ハナマキは既に机に商品を並べ終え、パイプ椅子に腰掛けて先月出たばかりの人気漫画の新刊を読んでいた。

「おはよう、ヒルガ」

「新刊できたの？」

「うん。締め切り一日過ぎてたけど。無理矢理入稿したら、なんとか刷ってもらえたよ！」

「締め切り破り！？」

「本文だけね。表紙は先に入れてあったってば。パソコンが不調で、作業中に何度も固まって大変だったんだから」

「ハナマキのパソコン、けっこう長く使ってるよね」

「そうそう。そろそろ買い換え時かも。でもお金がねえ……」

会話しながらも、手は止めない。ボストンバッグを開け、値札と青い布を取り出す。布は机にかけ、テーブルクロスにするのだ。

それからハナマキに荷物の番をお願いし、ホールの外にある宅配便集積場に、先に送っておいた段ボールを取りにゆく。ハナマキの台車を借りた、

段ボール箱の山から自分の荷物を見つけ出し、台車に積んで帰る。

段ボールをひらいて、詰め込まれた本を取り出す。

「ヒルガ新刊は？」

ハナマキに聞かれる。

「ん。私はナシ」

「なに、最近、書いてないじゃん」

「そうだね……」

短くこたえる。

同人誌即売会は巨大マーケットで、様々なジャンルに細分化されている。私がいるのは、人気アニメをモチーフにした、いわゆる「二次創作」だ。もともと評論で同人誌に入った。しかし、名古屋で評論同人誌なぞ需要があるはずもなく、オリジナルをさまよっても、やっぱり名古屋のイベントでは需要はほとんどなく……。

誘われるままに二次創作に足を踏み入れ、活動はどんどん広がって、いつのまにか季節ごとに東京、大阪を往復する生活になった。

手紙が来る。

『あなたが書く甘々のラブストーリーは最高です！』

『ふたりがどんな恋をするのか、続きが楽しみです！』

私は暗い部屋でうつむく。

古いノートパソコンのディスプレイだけが、あかあかと暗い部屋を照らす。

背後にはびっしりと書架があり、私が十代に耽読した純文学や哲学書たちが、ほこりをかぶって眠る。

定期的に出す同人誌のために、私は小説を書いている……けれど、どうやって書いているのかわからない。

締め切りの前夜にパソコンに向かうと、指が勝手に甘い物語をつむぐ。

文章の中に、私はどこにもいなかった。私自身は暗い部屋の書架から、じっと「書く私」を見つめているかのようだ。

気がつくとき書き上がっている見知らぬ文章を印刷して、私は印刷所に送っていた。

刷り上がったものを見て、心底ふしぎに思う。

これは、誰が書いたのだろうか？

どうやって書いたのだろうか？

知らない。

見たことがない。

知らない自分がパソコンに向かって原稿を書いていると、キーボードの音に気づいて、部屋を激しくノックする音がする。

「音がするわ！音がするわ！真夜中なのよ。何をやっているの？何を書いているの？」

激しい非難が夜を裂く。憂鬱に浸る間もなかった。私は手を止め、部屋の鍵を確認して耳を澄ます。

母のひとりごとが聞こえてくる。

「親不孝。本当に親不孝な子…」

母が何かを拾い上げたようだった。

「なんなのかしら、この本…。またあの子ね。女の子がこんなリクツっぽい本を読むなんて…。あの子は嫁には行けないわ！」

居間に、買ったばかりの分厚い評論書を忘れてきたことを思い出し、慄然とする。

隠さなければいけない。

本棚のすべてを。

パソコンの中に眠るすべての文書を。

東京の生活を。

イベントの一日は、始まってしまえば単調なものだ。

仕事といったら、机の前に座って、訪れるお客さんに本と釣銭を渡すぐらい。客足が途切れた頃合いを見計らって、ハナマキと交代で、自分も同人誌を「買い物」しに行く。

友達としゃべったり、業者による画材やグッズの物販を見たり、もらった友達の「新刊」同人誌を読んでいるうちに、あっという間に夕方になる。

「そろそろ行く？」

どちらからともなく切り出し、ハナマキとふたりでスペースを片付けはじめる。

売れ残った本と備品を段ボールに詰め、布テープで閉める。クロネコヤマトの赤い伝票を、ふたり並んで書いた。

四時を回ると、買い物客はほとんどおらず、サークルも既に店じまいを終え、周囲は裸の机ばかりが並ぶ。

荷物をまとめると、ハナマキの台車にふたりぶんの段ボールを積み上げて、宅配便受付の長い列に並ぶ。

「六時に新宿だよな？」

ハナマキが訊いた。

「そうそう」

「荷物どうする？ヒルガはホテルにいったん戻る？」

「どうしよっかなあ…。ハナマキ、私の部屋に荷物置いてく？」

「私、深夜バスが十一時半なんだよね。直で帰りたいから、持っていくわ」

「じゃあ、私は乗り換えの時に、大井町の駅のロッカーに入れて行こうかな」

四十分も並んでようやく宅配便を出し、疲れた身体を引きずって、ふたりは会場を横切って歩いた。長い通路を、黙々と歩く。

東京ビッグサイトの建物を出ると、夕方のあかい光が風景を照らしていた。駅にいたるコンクリートの道には、大きな荷物を持って立ち話をしたり、人待ち風情でうずくまっている集団が

散在していた。

疲れた、とは誰も口にしない。

ただ無言に、駅へと急ぐ。

大井町のロッカーに荷物を突っ込んで身軽になると、待ち合わせまでの時間つぶしに、ふたりでコーヒョップに入った。朝食に入った、あの店だ。

早朝とちがって、ずいぶん混んでいる。ようやく席を見つけて、座ることができた。冷たい炭酸飲料にストローを挿し、私は大きく息をつく。

「今日は、まったりなイベントだったね」

ハナマキが今日の感想を切り出した。

「だねえ。いろんなホールを回ったけど、目立って人が多いところはなかったね」

「このジャンルも、どんどん人が減っていくね」

ジャンル、とは、二次創作の場合の「元ネタ」の種別である。

「しょうがないね。アニメも終わって一年経つし。去年の人气が異常だったんだよ。まあ、こんなもんだよね」

「ヒメさんがやってるカップリングは、昔にくらべてむしろ賑わっているらしいよ」

「あー。そうかもね。最初はマイナーなカップリングだったのに……」

カップリング、とは、どのキャラクターを組み合わせさせて登場させるかという問題である。

「でもヒメさん、今は商業誌で忙しいんでしょ？」

「うん。ひとつ引き受けたら、次から次へで大変だって。つぎの同人誌即売会は、再録本でお茶を濁すしかないかなだって」

「は一。再録！」

「うちらも再録作る？」

売り切れになった既刊同人誌を、何冊分か合わせて、装いあらたに出すのが再録本。

「うちじゃ、売れないっしょ」

「だよね……。でも、ヒルガさんのあのシリーズはわりと人気あったから……」

「ジャンルの勢いがあつた頃なら考えたけど、今はもうねえ」

会話が途切れた。

ふたりして黙ってジュースをすする。冷たい水分が身体にしみわたっていくのがわかる。たいしたことをするわけではないのに、イベントというのは、どうしてこうエネルギーを使うのだろう。

「買い物はどうだった？」

私はハナマキの荷物を眺めて訊いてみた。

「うん。チェックしてたところは結局、ぜんぶ買えたよ。ヒルガは？」

「人気サークルさんは大阪のほうが少ない列で買えるし、今日は島中まわって発掘してきた。まだまだ見過ごしてた知らないサークルさんあるね」

「へえ。おすすりめあつたら、今度おしえて！」

「うん。また回すよ」

時計を見ると五時半だった。

そろそろ時間だ。

ふたりは荷物を抱えて立ち上がった。

夜はまだ長い。

はじめて新宿に降りたとき、高揚感にふるえたのをハッキリ覚えている。

広すぎる構内と、たくさんある出口。あてもないまま、新宿の駅構内をただ歩くだけで楽しかった過去の時間。

その「新宿」で、当たり前のように「待ち合わせ」を行っている自分に、あらためて驚く。

駅のつくりも、おぼろげながら把握しはじめている。東口で携帯を片手に、東京の友人と待ち合わせ…。

イナカ者と笑われてもかまわなかった。この時間が、幸福だ。「名古屋駅のナナちゃん」ではなく、「新宿東口」で待ち合わせるこの瞬間が。

東京の風には、名古屋なんかよりずっと濃い密度で、「情報」が詰まっているような気がする。最新の音楽、最新の流行、はやり始めた食べ物…。

新宿タカノの下で、メロンパンを売っていた。たぶん一年半後ぐらいに、名古屋に登場するだろう。

隣でハナマキが電話をかけている。

「うん…うん。そう、着いたよ。あっち…？ あ…？ わかんな…見えた！ 見えたから行く！」

ハナマキの視線の先、待ち合わせでごった返す人の群れの向こうに、カネちゃんが手を振っているのが辛うじて確認できた。

小走りで駆け寄ってみると、カネちゃんがひとりで待っていた。

「あとはミズナミさんだよ」

カネちゃんが携帯を握りしめてつぶやく。

しばらくして、カネちゃんの携帯が光った。メール着信。

「ミズナミさんは遅れるってさ」

カネちゃんは言った。

「先行くよね？」

カネちゃんが私たちに尋ねる。

私とハナマキは顔を見合わせた。

なにしろ「新宿でカラオケ」など行ったことがない。どこにあるのかもわからないのだ。

「シダックスでいいと思うんだ」

カネちゃんは私の目を見て言った。

私はうなづく。

「シダックス来てって、ミズナミにはメールしとく。あの子は場所わかるっしょ」

ミズナミさんは埼玉在住だ。

カネちゃんに連れられて、歌舞伎町のシダックスに入った。

歌舞伎町は、「社会見学」のつもりで、真っ昼間に歩いてみたことならあるが、歌舞伎町を「使う」日が来ようとは、まさか夢にも思わなかった。

周囲の空気が、「東京」だった。

きょろきょろしながら、カネちゃんについて店に入る。

受付を済ませて二階の個室に入ってしまうと、どこであろうと関係ない空間だった。よく知っている、ただのカラオケ空間だ。

メニューを開いた。

「飲み物を順番に言って！」

内線の受話器に手をかけながら、カネちゃんがテキパキした調子で言った。

「アイスティ」

「私もそれで」

カネちゃんはアイスティ三つ！と受話器で注文した。受話器を戻すと、メニューにかがみ込んで。

「何か食べる？」

「じゃあフライドポテト」

「ピザはどう？」

「いいね」

「飲み物が来たら、そのときに注文しよっか」

食べ物の手配が決まると、やっと分厚い曲リストに手を伸ばした。

皆、アニメ主題歌特集のページを繰っている。

ハナマキがりモコンを取り上げた。

「とりあえず、めぼしいのは入れちゃうね」

ハナマキが手と目を忙しく動かし、まとめて曲を予約する。モニター画面の右上には、ガンダムの主題歌、エンディングテーマの名前が新旧あわせてランダムに表示されていく。

「私、やっぱりジャンプアニメがいいー」

カネちゃんが席で手を振ってアピール。ハナマキがりモコンを渡した。

すでに一曲目のイントロが流れ始めている。私は目の前のマイクを握った。

飲み物が運ばれ、ミズナミさんが笑顔で部屋に入ってきて、モニタ画面は派手な色をまき散らし、アニメ主題歌は続く。

私はもちろん、その場にいる全員が、すべての主題歌を知っているし、歌うことができる。

「やっぱり第一期オープニングは良かったよねー！歌詞がめちゃくちゃ合う！ふたりの絆を盛り上げる！」

「絆だよねー、絆！」

歌の合間には、「あのアニメのコレがよかった」「あれがよかった」というポジティブな話題でひたすら盛り上がる。最終回は面白くなかった、などとはもちろん言えないし、言う必要もない。

会話の内容に深い意味はない。ただ空気に身をまかせる。

おなじアニメが好き同士なんだから、楽しく盛り上がっちゃいましょう！

愛、愛、愛！

作品愛にキャラ愛だよね。

あのキャラって、こんな格好させてみるとよくね？

どんちゃん騒ぎの夜は更けていく。

予約していた三時間を歌いきり、外に出ると、人とネオンの洪水で、テレビでしか見たことがない「新宿の夜」の風景が広がっていた。

今度は四人でマクドナルドに入り、周囲の目を気にしながら、買ったばかりの同人誌をそっと取り出して見せ合ったりする。

人気サークルの列の具合がどうだったとか、あそこは搬入数が少なかったから、午前中で売り切れたらしいとか、同人誌をサカナに会話に花が咲く。

「私、このサークルさんのアップの絵が好きなんだよ。アップがとにかくイイ！」

「表情に合わせたモノローグもいいよねえ」

「髪の毛のほっそい線！ どうやってペン入れしてるんだろ」

「その線の上に、トーン貼って削ってるっしょ。信じられない。作業が細かすぎる。めっちゃ時間かかってるよこれー」

「表紙のこの紙、はじめてみるけど、どこの印刷所なのかな」

「関西のあそこじゃないの？ キレイだけど、高いよね、あの印刷所」

「でもー、こんだけトーンがキレイに出るのはいいなあ」

「高いって。めっちゃめっちゃ高いよ」

「部数出ないと無理かぁ」

「けっきょく、安いところで刷っちゃうよね。値段と、締切のかねあいだねえ……」

「早割に出せば安いけど、締切はっやいもんね。そんなに早くできるかつつの」

「やればできるよお」

「ギリギリになんないと、ネームやんないもん」

「それ自分が悪いよね……」

「うーん。そうだけとお」

紙コップの中の氷も、とっくにすべて溶けていた。

十一時になって、ようやく腰をあげる。

「埼玉まで帰るの、めんどくさ～。ヒルガさん、ホテル？」

「うん。いつもの大井町」

「いいなー」

「ハナマキさんは夜行っしょ？」

「うん」

「じゃあ、また再来月だね」

「お疲れー」

「お疲れさまー」

「ミズナミさんは大阪は？」

「行けたら行きます～」

「ではでは」

「おやすみなさーい」

駅前でミズナミさんと、カネちゃんと別れた。

私はハナマキをバス停で見送ることにした。

新宿西口のバス乗り場。それは、異様な光景だった。

深夜の新宿のオフィス街に、これでもかと若者があふれていた。一様に、大きな荷物を抱えている。

整理のアルバイトの兄さんが、目立つスタッフジャンパーを着て、拡声器で叫んでいた。

「長野県行きのバスをご利用の方、ディズニーランドからバスはこちらに向かっています。まもなく到着です。向かいに付けますので、信号を渡ってください！」

「名古屋行きのバスは遅れております。しばらくお待ちください！」

皆、若かった。

買い物を終え、大きな袋を抱えた子ばかりだ。

暗がりの中で、疲労に彩られた若いエネルギーが、歩道いっぱい広がっていた。

バスの行き先は無数にある。私は胸を打たれてしまう。

各地から、こうして各地から…多くの若者が東京に吸い寄せられている。目的はそれぞれだろうが、ここでしか掴めないモノのために、皆来ているのだろう。私もまた…。

「すごいね」

ハナマキに言った。

「うん。でも、安いからね」

私の「すごいね」をどう取ったものか、ハナマキはそう答えた。

つぎつぎに到着バスの行き先が読み上げられていくが、名古屋はない。

私は時計をみた。十二時近い…。そろそろ終電だろう。

「電車がなくなるから、私、宿に戻るわ。ハナマキ、道中気をつけて！」

「うん。お疲れさまー」

「また名古屋でねー」

小さく手を振って別れた。

バス待ちの黒いかたまりを、何度も振り返りながら、駅に向かって歩いた。

駅に入る前に、立ち止まって天を仰ぐ。

いつかこの東京の空の下で暮らせるだろうか。

二十五歳になるまでには作家になろう。作家になったら東京に住もうと心に決めて、もう何年か経つだろう。もう私は、作家にはなれないかもしれない。

なれなくても、思い切って上京してしまえば…。

夜の黒い空と、東京の風。

ここは素敵なところだ。だけど、何も持たない今の私が暮らしたら、きっと飲み込まれてしまうだろう。

頭上のホームから、電車到着を知らせるけたたましいチャイムが聞こえてくる。周囲の人が走り出した。

*

名古屋の実家に帰ると、母は私の顔を見るなり自分の部屋に閉じこもってしまった。「お帰らないかい」のない家に、私は黙って上がった。

荷物をほどく間もなく、翌日からすぐに名古屋での現実が始まる。

鳩サブレを持って出勤すると、部屋の前の廊下でハセガワくんが上司に向かって頭を下げているのが見えた。どうやら和解だ。

私は部屋に入り、営業マンたちと上司の席に、鳩サブレを配って歩いた。

「休み取ってると思ったら、東京行ってたの？」

ヤマダさんに尋ねられる。

「ええ。友達がいるんです」

口からは、用意していた嘘がするすると出てきた。

上司がハセガワくんを従えて、意気揚々と部屋に入ってくる。

「おはようございます」

私が挨拶すると、上司は上機嫌で「おはよう」と言った。

「ハセガワくんもな、反省しているみたいなんだ。オレもちょっと熱くなりすぎたし、ま、いいんだよ。優秀な人材は、こだわらずに長く使うのが我が社の方針だ。オレはただのサラリーマンだが、キミらは未来ある優秀な人材だからねえ。そのうち起業でもするんだろう。そしたら、ハセガワくんも社長さんだなあ！ オレはただのサラリーマンだけど。ハケンのキミらは自由だし、未来があるからなあ！ そのうち社長か！ わはは！」

一昨年に退職金を四千万円もらったと噂の上司の演説に、部屋内にしらけた空気が漂った。営業マンたちは聞かぬふりをして資料を音をたててそろえると、わざとらしく大声で「いただきます！」を叫んで、次々に部屋を出て行った。

白い部屋には、私が残される。

上司の演説は続いていた。

「我が社では、実績のある子は長く使うよ。ここの部署がつぶれたって、キミは大丈夫。どこかへ回してあげるから。それに…キミは女だ。女はいくらだって仕事があるだろう。スーパーのレジとか。男はそうはいかんが…」

繰り返す上司の声は、もはや何の感情も呼び起こさない。

「そうですね」

私は黙って微笑んだ。東京の時間は終わった。名古屋の、古びたビルの片隅で、私はまた毎日を過ごす。

あと三ヶ月で、私は二十六歳になるのだった。